

社会学思想の展開の物語を描き、 知的興奮を沸き立たせる大著

サン・シモンに始まりルーマンで終わる未完の物語

盛山和夫

The image shows the front cover of the book 'Thinking about Sociology' (思想での社会学) by Tamaki Tomoaki (富永健一). The title is at the top, and the author's name is below it. The background of the cover is a black and white illustration depicting a group of people in what appears to be a social gathering or protest, with figures in the foreground and others in the background.

九人の社会
第三世代に位置づけられるのは、パーソンズとショットツ、それにルーマンである。ただこの中では、二〇世紀後半の社会学の概念、理論、および方法の大きな礎を築いたのである。

である。
さて、社会学は「近代化」の理論を打ち立てるのをめざしてきたというのが、富永氏の根本テーマである。たしかに、サン・シモンからバーンズに至るまでの社会学が「近代化」を最大のテーマとしてきたことはまちがいがない。しかし、一九七〇年代以降の社会学がまさに「ポスト・バーンズ」であるゆえんは、ウェーバーとデュルケムを両輪とする「バーンズアンド的総合」が忌避され、その古服が暗黙の共通課題とされたことにある。それは、「近代化」というテーマと探求のしかたそのものの「問い直し」を意味していたというべきだろう。たとえばこれまでの社会学が「近代化」を論じた際の分析枠組みとしてきたことは、「方法論的ナショナリズム」として批判されたりするのである。

いだに……共通の基盤があることを理解できなかつたことを嘆いてゐる。しかし、氏の紹介を読めば分かるように、最初に対立意識を抱いたのはむしろパーソンズその人であった。パーソンズは、シユヌツがたんに現象学的な反経験科学の立場から発言しているものと思いこんで、シユヌツが提起した問題、すなわち、すでに一次的構成概念として成立している日常的生活世界についての、二次的な客観的学問としての社会学はいかにして可能か、という問題の意味を理解できなかつたようなのである。

実際、社会的 world とは意味世界であるとしたシユヌツの（評者から見ればかなり荒削りではあるが）基本テーゼは、ようやく今日の社会学に広く共有されてきてはいるものの、これによつて、それまでひたすら経験科学たらんじてきた社会学を根底から組み立て直さなければならなくなつたことに気づいてゐる論者は多くない。

その例外がルーマンである。ルーマンが、「人々や行為ではなく」コミュニケーーション」を構成要素とし、「自己言及」や「パラドックス」を伴う「社会システム」を社会学の対象として定立しようとしてきたのは、とりもなおさ

す、古典的社会学の陥路から
の脱出をめざしてのことであ
った。評者はルーマンの戦略
にはやや疑問をもつている
が、一つの可能性であること
はまちがいない。富永氏も、
未翻訳の『社会の社会』を解
説する中で、そのように「一
見重複する」と見える題名表示
によつてあえて示さねばなら
ないといふ。社会学という
学問の特殊性があるとして、
構成された意味からなる「社
会」を対象とする「構成主義
的」なルーマン社会学への共
鳴を表明している。ただ、こ
れが「近代化の理論」として
の古典的社会学像の修正を意
味していることについては、
残念ながら触れられていな
い。